

## 晩秋の朝に

H.M

気持ち良く晴れた晩秋の朝、姉とランチの約束があり、隣の駅まで自転車を走らせ『阿佐ヶ谷行き』のバスに乗り込んだ。

平日の十時過ぎ、車内は空いていて中程の座席が一段高くなっている所に座った。車内も車外もよく見渡せる。年に数回しか利用しないバスだが、電車とは全く違うこの心地よさは何だろう。座ったままで目的地まで運んでくれる感じが、ゆったりと幸せな気持ちにしてくれた。

バスが走り出すとその気持ちはますます強まる。狭い商店街ではすれすれの所を走る自転車、歩く人々、その表情までが目に入ってくる。様々な表情を眺める内に、それぞれの人生の中でどんな時期を過ごしているのだろうと想いが巡る。ふと数か月前に新聞に書かれていたことを思い出した。

小説家で尼僧の瀬戸内寂聴氏が大病で大変な辛さ苦しみを体験した。「これまで自分は多くの人の話を聞き説法をしてきたが、本当の苦しみを分からずに話をしてきた。申し訳なかった」といった内容だった。出家までした人が人の苦しみ悩みを心から理解出来てなかったということに驚いた。

他にも終末期医療を専門とし、多くの末期患者に寄り添って診療をしてきた医師が、自身が癌になり、病が進行し痛みと不安の中で初めて患者の気持ちが理解出来たというドキュメンタリー番組を観た。体験して初めてわかることがある。

私も思い出す体験がある。かつて家庭内の悩みを抱えていた時に、親の介護の為実家へ車で通った。往復の車中、最初の頃は元気なD.J.のトークやサザンの歌を、時にはボリュームを上げ元気を貰いながら運転していた。ところが、悩みが重くなってきたとき、ショパンのピアノコンチェルトしか聴けなくなり、

繰り返し聴いた。やがてどんな音も重くて聴けず、無音でひたすらハンドルを握っていた。体験しなければわからない事だった。

悩みを相談した後の相手からの言葉で、気持ちに寄り添ってもらっていると感じた時、話さなければよかったと感じた時、また何も聞かないでいてくれる優しさを感じた時など様々だ。

苦難を乗り越えることで人の苦しみを理解する心の幅が育つなら、悩みは肥やしともいえる。そのうちに経験しないことも理解できる優しい想像力が育ってくるような気がする。

気づくとバスは目的地の近くまで来ていた。